

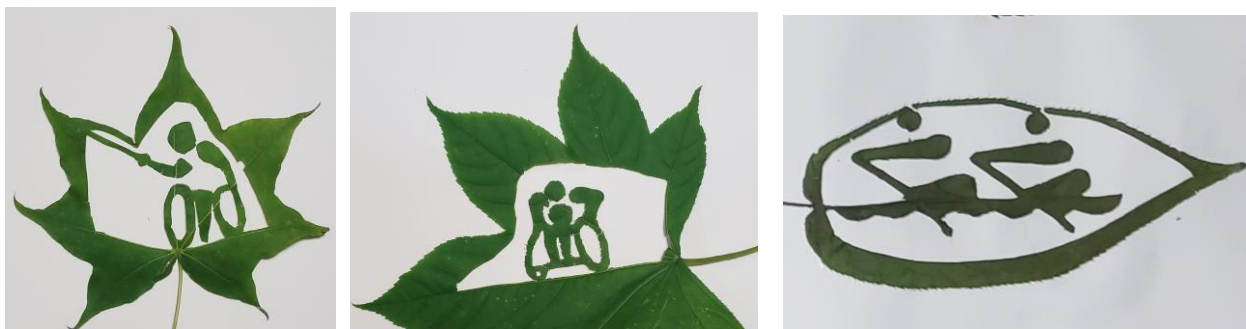
## 葉っぱの切り絵（リーフアート）を始めました

北海道の佐野です。今年の北海道の夏は、例年になく暑く、真夏日の連続でしたが、8月も後半になると、ようやく、平年並みに落ち着き、すっかり秋の装いとなっています。

さて、8月24日から、東京パラリンピックが始まりましたね。世界各国からアスリートたちが集まり、連日、熱戦を繰り広げています。私も、毎日、テレビにくぎ付けになっています。

自然観察指導員であり、森林・林業関係の公務員である私は、自分らしいパラリンピックの応援ができないかと考え、パラリンピック23協議のピクトグラムを23種類の樹種の葉っぱの切り絵（リーフアート）で表現することとしました。とはいえ、リーフアートに挑戦するのは初めての試みだったので、試行錯誤の連続でした。しかも、北海道には、常緑広葉樹がほとんど生えておらず、薄い落葉広葉樹ばかりなので、思い通りに切れず、苦労しました。それでも、何とか、23種類の樹種でピクトグラムを完成させるという目標を達成することができました。

いくつか紹介すると、順番に、車いすフェンシング（イタヤカエデ）、車いすラグビー（ハリギリ）、ボート（エゾヤマザクラ）です。イタヤカエデ、ハリギリ（北海道ではセンノキという呼び名が一般的）、エゾヤマザクラともに、北海道を代表する樹種です。23樹種のうち、外国産樹種は、ユリノキ等5種だったのですが、パラリンピックなのだから、もう少し、外国産樹種の比率を多くしたかったですね。



パラリンピックのピクトグラムのリーフアートを作っているうちに、だんだん、リーフアートの楽しさに魅了されてしまい、職場からの帰り道に、葉っぱを集め、毎晩、リーフアートの作品作りに没頭するというのが日課になってきました。

次に紹介する作品は、週末に、農作業や自然体験活動をしている仲間たちの素敵なワンシーンを切り取ったものです。ブランコはカシワ、仲良し散歩はミズナラの葉っぱで作っています。空をバックにして、リーフアート作品をかざすと、いっそう、映えますね。



リーフアート作品は、職場でも披露したのですが、せっくなのだから、パラリンピックのピクトグラムで終わらせるのではなく、森林環境教育の教材としても活用できるよう、林業作業の様子をリーフアートにしてほしいというリクエストがありました。

① 植え付け（シウリザクラ）

北海道の主要な造林樹種は、カラマツ、トドマツ、アカエゾマツ。ヘクタール当たり、2千本から3千本植栽します。

② 下刈り（カツラ）

北海道では、植えてからしばらくの間は、ササとの闘いです。植えた苗木がササの高さを突破するまでは、毎年、猛暑の中、下刈り作業を行います。

③ 除伐（レッドオーク）

苗木がササの高さを超えても安心できません。今度は、自然に生えてきた成長の早い広葉樹との闘いです。植えた木の成長の邪魔をする広葉樹を伐採します。



④ つる切り（カシワ）

林業にとって、ササ、成長の早い広葉樹に並ぶ厄介者のはつる植物です。植えた木に巻き付き、健全な木の成長を阻害させるので、つるが細いうちに切る必要があります。

⑤ 枝打ち（エゾヒョウタンボク）

人工林で育てる木の主要な用途は建築材です。伝統的な軸組工法の家では節のない柱が好まれるので、節が柱の表に出ないように、枝打ちをします。

⑥ 間伐（ミズナラ）

木を植えて30年くらいたつと、植えた木同士の競争が激しくなります。そのままにしておくと、込み合って暗い森になってしまうので、少し、間引いて、森を明るくする必要があります。

⑦ 主伐（ハリギリ）

カラマツでは40年、トドマツやアカエゾマツでは60年を過ぎると、植えた木も十分な太さに成長しています。いよいよ、最後の伐採、主伐です。植えてから伐採まで、最低でも40年以上の長期間を必要とする林業。伐採された木も大切に使いたいですね。



秋になり、これから、葉っぱも様々な色に変化する季節ですから、今度は、自然との楽しい付き合いとして、北海道の子どもたちとリーフアートを楽しみたいと思います（佐野由輝）。

## シラカバ林を散策して

コロナ禍の中、所用で山梨県清里方面に出かけたついでに、長野県佐久穂町八千穂高原のシラカバ林を散策し、回想にふけてきました。

まず浮かんだのが、「白樺（しらかば） 青空 南風♪」が歌いだしの『北国の春』（きたぐにのはる）は、1977年4月に発表された千昌夫の歌謡曲。この歌を作詞した、いではく氏は長野県南牧村出身で、故郷の野辺山あたりをイメージして作詞したという。郷里を離れ、四季の変化に気づかない都会に住む北国出身の人の望郷の想いが、また 北国の春を迎えた思い出が、春の野原の有様を生き生きと表現している。ちなみにこの野辺山地区にある野辺山駅は JR 小海線（JR 小諸駅～JR 小淵沢駅）の標高1345m67cmにあるJR 最高地点駅です。この JR 小海線松原湖駅から車で約30分の所に目指す「シラカバ林」があります。

日本国内で北海道とともに白樺の生育地として有名なのは、長野県の信州です。特に北八ヶ岳の東斜面に位置する長野県佐久穂町八千穂高原（標高1800m）には200ヘクタールもの面積に50万本もの白樺が群生していて、日本一の白樺林の美しさを堪能できる場所（写真参照）として知られている。

高山に生えるダケカンバ（岳樺）と混生していると、一見判別が難しい。シラカンバの樹皮はほぼ真っ白だが、所々に「へ」の字形をした黒っぽい枝痕（写真参照）がついているが、ダケカンバの樹皮には「へ」の字模様はないので区別できる。またシラカンバに似ているウダイカンバがある。漢字では「鵜松明樺」と表すウダイカンバは幹に細かな横じわが入っているのが特徴。幹は油分が多く生木でもよく燃えるため、鵜飼で使う松明の灯りに使ったことにより名称となったとの事。

シラカンバの春先の水の吸い上げはめざましい。小枝を切ったり、幹に傷をつけると樹液が滴り落ちる。北海道美深町では、シラカンバの樹液を100%ボトルに詰め「森の雫」として販売している。シラカンバの樹液はさらさらで透き通っていて一見水のように甘みもあり、虫歯予防で知られるキシリトールの原料でもある。残雪の残る4月、幹に小さな穴をあけパイプを通して採取をする。芽吹き of 時期になると液が止まるので約一か月が採取期間。1本の木に穴は1つ。シーズンが終わると穴を殺菌して木の栓でふさぎます。こうすることで白樺は枯れないそうです。

面白いことに白樺の樹皮には殺菌効果のある成分が含まれているので、倒木したあと材は腐っても白い樹皮だけ残るそうです。

また、上皇様と上皇后様が出会った軽井沢に多いことから、美智子上皇后の「御印（＝持ち物等に記すマーク）」はシラカバとなっています。

白樺にはさまざまな通称があり、とても生命力が強いことから白樺自体には「マザーツリー」、天然のミネラルやアミノ酸を豊富に含むことから樹液には「森の看護師」という通称が生まれました。

また、白い樹皮が高原を明るくイメージにすることから「高原の白い貴公子」と呼ばれている。

シラカバはなんとなく青春時代を思わせる樹木だと個人的には気に入っている樹木ですが、皆にもお気に入りの樹木等がありますか？

龍門 海行（柏市）



シラカバ林風景



樹木に見られる「へ」の字型の枝痕

## 産卵

身近なところではカタバミの葉にヤマトシジミが、ミカン科の葉にナミアゲハ・クロアゲハが卵を産みに来る。ホトトギスの葉にルリタテハ、ギシギシの葉にはベニシジミが産卵する。ヤマノイモにキイロクビナガハムシ・ヤマイモハムシ・キベリクビボソハムシが産卵と食事に訪れる。同じようにヤマノイモ科の葉にダイショウセセリの産卵がみられる。アブラムシのいるところにはヒラタアブの仲間が卵を産みに来る。クスノキやタブノキの葉にアオスジアゲハが産卵する。どの親も生まれた幼虫がすぐに食べられるように場所を選び産卵している。一方ミドリヒョウモンは谷津田の朽ち木に卵を産んでいる。そのため孵化した幼虫はトコトコと自分で食草であるスミシを探す旅に出ていく。



小倉谷津田9月  
ミドリヒョウモン産卵

### ツマキシヤチホコ幼虫対ヤドリバエ



① 逃げる幼虫追うハエ



② ハエが幼虫の背中に産卵



③ 卵を取ろうとしている幼虫



松本 美千代（千葉市）

## オオセイボウ

東金市のときがね湖は昔谷津田だったが、千葉県南部地域の工業用水と上水道の水源として 27 年前に完成した。当時は、谷津田周辺の植物や虫等が観られなかったが、東金市の自然グループの選別除草が始まり、徐々にセンブリやオミナエシ等の種が蘇り、最近は毎年花やそれに来る虫等を楽しむことができる。一周 3.6キロ、ジョギングや散歩の人たちでにぎわっている。一昨年の9月、オミナエシに来た美しく青く輝く蜂、オオセイボウは忘れられない。

日本にいるセイボウの仲間は 30 種類以上いるそうだが、オオセイボウは其中最も大きくて 13~20 mm。ハチの種類なので針を持つ。スズメバチのように毒はないが、刺されるとミツバチなどと同じように赤く腫れるそう。スズバチやトックリバチは、イモムシなどに麻酔をかけ、用意した泥巣に連れ帰り、自分の卵を産み、蓋をする。オオセイボウはその泥巣に穴を開け、自分の卵を産み付け、エサを横取りするのだ。その巣から生まれてくるのはもちろんオオセイボウの子孫だ。こんなきれいな姿してなんと図々しい！ とは言え、こんな美しく光り輝くハチに出会った日には、コロナ禍の憂さはあっという間に消え去り、「なんとラッキーな日だろう」と、幸せな気持ちで心がいっぱいになる(\*^-^\*)



オオセイボウ

山下美佐子（東金市）

## キジバトの変貌ぶりとピジョンミルク

ハトと言えば一番馴染み深いのは市街地の広場などにおいて、人の投げる餌を啄むドバト（カワラバト）だと思います。古い時代に家禽化されたものが移入され、寺社などで神の使いとして保護された歴史が長いので、あまり人を恐れません。それらが再び野生化したドバトは日本の鳥類目録の番外扱いです。一方キジバトはヤマバトとも言われる野生種です。私の少年時代は戦後の食糧難の酷い時でしたから、野鳥も貴重なたんぱく源として常に狙われていました。大人からは猟銃の標的にされるし、子供達でもゴム紐のパチンコを向けたものです。当然キジバトは用心深くなり、人を見れば逃げるのが普通でした。



ところが近年、キジバトの警戒心が薄れています。特に人との接触の多い都市公園などではドバトと変わらない程に図々しく人を恐れなくなっています。

左の写真はカメラの前で芝生に寝転んで日光浴と羽繕いの場面ですが余りに無防備な姿に呆れます。

愛鳥精神が普及し鳩も安心して暮らしていると思えば、野鳥の会会員としては喜ばしい事かも知れませんが・・・やり過ぎではないかと複雑な気分です。

野鳥が全体に減少していると言われる中でもキジバトは数を増やしている様です。

街路樹や民家の庭木など身近な場所で繁殖しているのを見る事があり、営巣場所に不自由は無さそうです。巣は小枝を粗く組んだだけの簡単な作りで、保温のための巣材は敷いてありませんから下から覗くと卵が透けて見える程です。街路樹の下で割れている卵を見た事がありますが、大風で巣がゆすられて隙間から落下した模様でした。こんな失敗があってもハトにはピジョンミルクと言われる繁殖に有利な武器があります。

それは哺乳類のミルクに似た成分でハト類の **嗉嚢** から分泌される粥状のものです。親鳥が餌を十分にとれば季節に関係なく雛に与えられるので、多くの鳥の繁殖期が餌の多い初夏に集中するのに対し、ハトには何時でも繁殖できる武器がある訳です。

ところで、哺乳瓶会社のピジョンはご存じでしょうか？会社名の由来について同社のホームページを調べたところ、平和のシンボルとしてハトをイメージしただけの様です。ピジョンミルクに絡めた気の利いた由来話を期待していたのに拍子抜けでした。

坂本文雄（佐倉市）

## 自然体験と生命倫理に関する私見

世間ではデルタ変異株が猛威を奮い、夏季休暇処では無いですが、それでもお盆はやってきます。千葉県内ではお盆は旧暦の7/13~7/15(今年は8/20~8/22)に行うご家庭が多いでしょう。

連日30°Cを超える猛暑続きでも、お盆を迎えれば暦の上では立秋を過ぎます。ツクツクボウシが鳴き始め、日暮れは早まり、コオロギやカナタタキが夏の終わりを告げるようになりました。虫の音に季節の移ろいを感じるのは日本人独特の感性だそうです。しかし、昨今では蝉や蟋蟀達の合奏に関心が無い人々が増えてきたように思えます。先日8/6の夕方、学生時代に住んでいた街の近くで凄惨な事件が発生しました。走行中の小田急線の車内で男が複数の乗客を刃物で切り付けて逃走した事件です。

「誰でもよかった、幸せそうな女性を見ると殺したいと思う。逃げ場が無く大量に人を殺せるから電車を選んだ」と供述しているそうです。

このようなことが起きるたびに思い出す事件があります。「女子高生コンクリート詰め殺人事件」は1988年で犯行年齢16-18歳の4人。通行人をゲーム感覚で40日に亘り拉致監禁し暴行の上で生理めにしていました。「酒鬼薔薇聖斗事件」は1997年で犯行年齢14歳。仮想世界に引き籠り同級生を殺傷しています。尚、「女子高生コンクリート詰め殺人事件」の犯人は2004年に再び「三郷市逮捕監禁致傷事件」と2013年に振込め詐欺を起こしています。これら犯人の現在の年齢は38~51歳。つまり、心理学の試験では必出の「エリクソンの発達課題」を、彼らはクリアしないまま成人し、既に親世代に達していることとなります。家庭内暴力が世代間で伝播することはよく知られていますが、それと根幹を同じくして「仮想と現実の判別不能、生命倫理感の欠如」も世代間で伝播するため、負の連鎖が生じます。健全な生命倫理感とは子どもの頃の自然体験により体得されるものですが、未成年期での自然体験の多寡自体も世代間で伝播する(2020年日本自然保護協会

< <https://www.nacsj.or.jp/2020/07/20836/> > )ため、負の連鎖に拍車が掛かります。

阪神淡路大震災の翌年1996年に、本業で「生き物緑地活動支援委員会(委員長:進士五十八東農大大学長(当時))」を設置、委員会の提言を基に1997年に日本野鳥の会と共に柏市で「甦れ!里山シンポジウム」を開催、全国が「里山ブーム」に湧く魁になりました。あの時の委員会とシンポジウムの主旨を見返すと、「自然体験の激減/仮想と現実の区別が混乱=>生命倫理の欠如=>世代間の負の連鎖からの脱却」となっています。あれから既に四半世紀が経ち、生物多様性を始めとしたSDG'sが官民共通の世界的な戦略として位置付けられるようになりました。しかし、自然体験が足りないことに起因する負の連鎖は断切られる処か、より一層見え難く潜在化し、更に深刻化してしまっていると痛感しています。コロナ禍のため自由な外出ですら憚られる昨今、健全な生命倫理感という恩恵を齎す自然体験を如何にして次世代に引継いで行けるのか、改めて考えざるを得ないと思われれます。

高木純一 (習志野市)

## 2度目のスズメバチ被害

5、6年前にオオスズメバチに刺されて以来かなり注意してきたが、先日キイロスズメバチの被害にあってしまった。前回抗体検査は擬陽性の判定だったので、アナフィラキシーショックが気になったが特に問題はなかった。ポイズンリムーバーで吸血し、水をかけて冷やして、15分程度様子を見た後に作業に戻った。2度目で多少耐性ができたのかななどと素人判断をしたのが甘かった。

次の朝、刺された右手が肘から下が全部が腫れ上がって、3日たってもまだ腫れが引かない。前回は足だったが、やはり医者が処方した薬を飲み終わってもズボンを履くのに不都合なほど腫れて閉口したことを思い出した。前回と同様ステロイド軟こうを使うか、自己治癒力を信頼するか判断に迷いつつ編集作業をしている。 伊藤(事務局)